

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 27 年 6 月 5 日現在

機関番号：11601

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24520698

研究課題名(和文) 効果的教材開発を目指した多様な英語の理解度に関する研究

研究課題名(英文) Toward a Development of Effective Materials in Teaching English as a Lingua Franca

研究代表者

松浦 浩子 (MATSUURA, Hiroko)

福島大学・経済経営学類・教授

研究者番号：70199751

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,700,000円

研究成果の概要(和文)：国際語としての英語の多様性、及び国際共通語としての英語教育の必要性に鑑み、本研究では日本人英語学習者と多様な母語の英語話者間の音声英語理解度に関する基礎研究を行った。言語学的、心理学的、教育学的観点から、相互理解を阻む要因を複合的に分析、教材開発に必要な要件について分析した。具体的には、英語訛り、理解度、学習者の英語力との相関、日本語訛りに対する受容態度と英語訛りに対する受容態度との関連性、多様な母語話者に対する日本人英語の理解度などに焦点を当てて調査した。

研究成果の概要(英文)： With the importance of teaching both World Englishes (WE) and English as a lingua franca (ELF) being recognized around the world, ELT practices in Japan need to keep pace. Aiming to offer models in teaching WE/ELF, the present study explored the relationships among tertiary-level Japanese learners' evaluations of accentedness and comprehensibility, actual comprehension, and general English proficiency. The study also examined relationships between Japanese learners' L1-speaking backgrounds and their attitudes toward English accents. The study was further extended to examine intelligibility and comprehensibility of Japanized English to listeners from varying L1 backgrounds.

研究分野：英語教育

キーワード：国際共通語としての英語 訛り 理解度 受容態度 英語力

### 1. 研究開始当初の背景

今や英語は世界の共通語である。地球規模の英語使用者数は、10億人とも20億人いるともいわれている。これら膨大な話者の存在は、英語が言語的に均一ではなく、音韻、意味、統語、語用論の各側面から多様性のあるものであることを示唆している。このような現状を踏まえ、世界の英語教育界は、様々な英語に対応できる能力の涵養を目標に、言語モデルや指導内容・指導方法を見直さなければならない時期にある。

言語学者 Kachru (1992) のいうところの Expanding Circle (英語を外国語として学び使用する国々) に属する日本では、Inner Circle 英語 (母語としての英語) の一部である米語を主たるモデルとして発音や聴き取り練習を行い、単語や言い回しを学ぶケースが多い。このような単一モデルで学んだ学習者は、実際の英語使用場面で多様な英語、特に馴染みのない Outer Circle (英語を第二言語や公用語として使用する国々) の英語に接すると戸惑いを感じるだろう。本研究では、国際語としての英語の多様性に鑑み、日本人英語学習者と多様な母語の英語話者間相互の intelligibility (音声面での理解度) 及び comprehensibility (意味・内容面での理解度) を促進するための教材開発を目指して、基礎研究並びに応用研究を行う。

### 2. 研究の目的

本研究は、研究者による平成 21 年度～平成 23 年度基盤研究(C)「国際語としての英語の音声理解及び内容理解に関する研究」を基に、より教育学的視点を加えて、基礎研究、応用研究として進化させることを目標としている。具体的には次の 3 点に取り組んだ。

- (1) 多様な英語に接する日本人学習者の受容態度を分析し、影響要因を明らかにする。
- (2) 多様な話者に対する日本人英語の理解度を調べ、理解度を妨げる言語学的要因を

解明する。

- (3) 日本人学習者が通常の教育現場で接することのない多様な英語の理解度を調査し、理解度の意味するところを多角的に分析する。

### 3. 研究の方法

取り組んだ課題及び方法は、以下の(1)～(3)に大別される。

- (1) 多様な英語の受容態度について

これについて、～ の調査を実施した。受容態度と社会言語学的背景に関する調査

多様な英語に接する英語学習者もまた多様である。ここでは、日本人大学生被験者グループに、馴染みのない音声英語 (被験者にとって訛りのある英語) を聞いてもらい、その受容態度と、日本語訛りの使用状況、性別、英語力等の社会言語学的、教育学的特性との関連性について調査した。次の(a)～(d)において、どちらのグループが英語の訛りに寛容かを問うた。

- (a) 訛りのある日本語を話す被験者と標準語しか話さない被験者
- (b) 地方在住者と首都圏在住者
- (c) 男性と女性
- (d) 英語力が高い被験者と英語力が低い被験者

Outer Circle 出身の英語話者 5 名 (各話者の母語は、ヒンディー語、ベンガル語、シンハリ語、スワヒリ語、アカン語) から採集した音声英語を使用した。被験者は、東日本各県出身の 173 名の日本人大学生で、上中下 3 つの英語力グループに分けられた。

データ収集にあたって、Rindal (2010) らを参考に意味微分法を用いた質問紙を作成した。使用した形容詞は、「好ましい - 好ましくない」、「信頼できる - 信頼できない」、「親切である - 親切でない」、「丁寧である - 丁寧でない」、「自信がある - 自信がない」、

「知的である - 知的でない」の 6 対である。質問紙には加えて、被験者の年齢、性別、専攻、訛り使用状況、出身地を問う項目を含めた。

#### 受容態度と英語発音に対する自信度に関する調査

日本人学習者自身の英語発音に対する自信度が、馴染みのない英語の受容態度にどのように影響を及ぼすのか調査した。

被験者は 263 名の日本人大学生である。英語を第二言語として使用している話者 5 名が読んだ短い文章を被験者に聞かせ、その印象について意味微分法を介して調査した。各英語話者の母語は上記と同一である。先行研究を参考に、質問紙には 9 対の形容詞を使用、それらを「知性」、「社会的魅力」、「言語力」の 3 つに分類した。また、被験者には自分の発音に対する自信度を調べることを目的とする 10 項目のアンケートに答えてもらった。アンケートの回答を因子分析にかけた結果、「発音への自信」、「発音の受容」、「非母語話者としての自覚」の 3 因子が抽出された。これらの因子と意味微分法で得たスコア間の相関関係について調べた。

#### 受容態度と留学経験に関する調査

日本人英語学習者にとって馴染みのない英語に対して、留学経験のない学生と留学経験がある学生ではどのように反応が異なるのかを調べた。と同じ 5 名の英語話者の英語を日本人大学生 2 グループに聞かせ、その印象について意味微分法を用いて調べた。意味微分法で使用した形容詞対、また各英語話者の母語は上記と同一である。

被験者は留学経験のない大学 1 年生 77 名(平均 TOEIC スコア 442.34)と 5 か月間のアメリカ留学を経験した大学 3 年生 68 名(平均 TOEIC スコア 668.97)であった。3 年生グループは 1 年生当時同程度の英語レベルで

あり、ほぼ同質のグループと考えられるためこの 2 グループを比較した。

#### (2) 日本人英語の理解度について

2010 年 7 月、カナダのバンクーバー市で開催された IAWE 2010 にて口頭発表した International Intelligibility of Japanese English: The Case of *Katakana Eigo* をベースに、日本人が英語を話す際に使いがちなカタカナ英語、和製英語の国際的理解度について調査した。被験者は、アメリカ人(英語母語話者)、フィリピン人(フィリピン語と英語のバイリンガル)、韓国人(英語学習者)、インドネシア人(英語学習者)の 4 言語グループである。被験者はすべて現地の高等教育機関に在籍し、日本語学習経験はない。

先行研究同様、被験者には 2 種類のタスクを課した。1 つ目は、カタカナ英語を含むセンテンス聞き、カタカナ英語部分を適切な英語で書き取るタスク(Part I)、2 つ目は、和製英語を含むセンテンスを聞いて、話者の意図する意味を英語で説明するタスク(Part II)である。なお、アメリカ人及びフィリピン人被験者に比べて英語力の劣る韓国人とインドネシア人被験者については、意味説明の際、母語使用を許可した。さらに、インドネシア人被験者については、日本人英語の理解度と総合的英語力との相関について調査した。

具体的課題は、国際的理解度を損なう日本人英語の特徴は何か、また、聴き手の英語力は理解度にどのように貢献するのか、という 2 点である。

#### (3) 多様な英語の理解度をモデル化する

日本人にとって馴染みのない Outer Circle の音声英語を英語学習者 89 名に聞かせ、リスニングテスト得点に見る実際的理解度、被験者が感じる主観的理解度と訛りの強さ、総合的英語力(リスニング、リーディング)から、馴染みのない英語を理解するというこ

はどのようなことなのか、多角的に検証した。課題は次の通りである。

- (a) 主観的理解度は実際の理解度の指標となるか？
- (b) 訛りの強さは、実際の理解度及び主観的理解度に影響を及ぼすのか？
- (c) 英語力は、実際の理解度及び主観的理解度の指標となるか？
- (d) 訛りの強さは、英語力によって感じ方が異なるのか？
- (e) 訛りの強さ、主観的理解度、リスニング力、リーディング力のうち、実際の理解度を最もよく予測できるのはどれか？それは英語力によって異なるのか？

#### 4. 研究成果

##### (1) 多様な英語の受容態度について

受容態度と社会言語学的背景に関する調査

得られたデータについて、グループ間の平均値の差の検定を行った結果、次のような点が明らかになった。

- (a) 標準語しか話さない被験者グループは、訛りのある日本語を話す被験者グループに比べて訛りのある英語発音に寛容であった。
- (b) 首都圏在住者グループと地方在住者グループ間では、訛りのある英語発音への受容態度に有意差は見られなかった。
- (c) 男性と女性の間では、訛りのある英語発音への受容態度に有意差は見られなかった。
- (d) 英語力の高いグループと低いグループとの間では、訛りのある英語発音への受容態度に有意差は見られなかった。

(a)についてグループ間に有意差が見られた理由として、標準語話者は首都圏在住者が多いため、日本語訛りに郷愁を感じ、肯定的に受け入れる態度ができています。そのような母語訛りに対する態度が英語訛りへの寛容

さにつながったのではなからうか。一方、訛り話者は自分の訛りに引け目を感じ、訛り全体に対して肯定的態度は取りにくい。母語訛りに対する否定的態度が英語訛りへの受容態度にも影響し、標準語話者と比べて低い評価に留まったのではないかと考えられる。

受容態度と英語発音に対する自信度に関する調査

被験者自身の英語発音に対するアンケートで得られた「発音への自信」、「発音の受容」、「非母語話者としての自覚」の3つの因子と、馴染みのない英語を聞いた際の「知性」、「社会的魅力」、「言語力」評価との間の相関関係について調べた結果、「発音の受容」が、「知性」、「社会的魅力」、「言語力」評価のいずれとも有意な負の相関関係を示すことがわかった。「発音の受容」とは、自らの発音を受け入れているかどうか、自身の発音に満足しているかどうかを意味している。結果については、2通りの解釈が可能である。一方は、自らの発音に満足していない被験者ほど、他者の英語を評価し、受け入れる傾向がある。また一方で、自らの発音に満足している被験者ほど、他者の英語が受け入れられないとも考えられる。この調査は量的な研究に留まっているため、結果の解釈には限界がある。今後は質的研究を実施し、より詳細な検証を行う必要があるだろう。

受容態度と留学経験に関する調査

留学未経験者と留学経験者グループ間の差は「好ましさ」、「信頼性」、「親切さ」及び「礼儀正しさ」を含む「社会的魅力」において認められた。留学経験のある3年生グループの平均値が3.23(5点満点)であるのに対し、1年生グループは3.09となり、有意差が確認された。特に「礼儀正しさ」では3年生グループが3.27であったが、1年生グループは2.96であり、最も大きな有意差が認められ

た。

個別の母語話者では、アカン語を母語とする話者に対して「自信」、「礼儀正しさ」、「好ましさ」、「親切さ」で、2 グループ間で有意差がみられた。さらにベンガル語話者に関して、「礼儀正しさ」及び「信頼性」でやはり有意差が確認された。

2 グループの英語力の差が結果に影響した可能性はあるが、この点に関して検証するには「留学経験のない英語力の高いグループ」との比較が必要であり、結論づけることは難しいと考えられる。留学経験のある3年生グループはアメリカ滞在中に日々多様な英語に触れる機会があったと推測でき、非母語話者との日常のコミュニケーションを経験し、異なる訛りを受容する態度が育成されたと考えられる。また相手とのコミュニケーションを重視し理解することを優先し、アクセントの強さに対しては注意を払わなくなったとも推測出来る。

## (2) 日本人英語の理解度について

一般的傾向として、直接借用のカタカナ英語（発音のみが日本人英語、意味は英語と同様）は、いわゆる和製英語（意味シフト、疑似英語、語短縮、和製造語を含む）に比べて、話者の意図するところが伝わりやすい傾向が認められた。つまり、音声面の日本人英語化（Part I 項目）は、意味や語形態の日本人英語化（Part II 項目）に比べ、聴き手が克服しやすいのである。しかしながら、アメリカ、フィリピン、インドネシアの各被験者グループが Part I と Part II 得点間に有意差を示す一方で、韓国人グループに関しては有意差が見られなかった。この点については、韓国語と日本語の間で共通に使用されることば（例：シュークリーム、コンセント、フリーサイズなど）が多く存在することが影響しているものと思われる。この他に、文化的差異、英語力などの影響が各被験者グループのデ

ータに観察された。

次に、インドネシア人被験者の総合的英語力と、彼らの日本人英語に対する理解度の相関について調べた。被験者はリスニングとリーディングからなる英語テストを受験した。理解度テストの総合点とリスニング得点との間に有意な相関関係は見られなかったものの、リーディング得点については有意な相関が見られた。このことは、語彙や文法力に優れた聴き手ほど、本来の英語から逸脱した日本人英語の意味を正しく類推できることを示唆している。しかし、インドネシア人被験者の英語力は中級レベルの狭い範囲（low intermediate level）に限定されていることから、今後幅広いレベルの被験者を募り、同様の結果が得られるかどうか再検討することが必要であろう。

## (3) 多様な英語の理解度をモデル化する

訛りのある英語を聞いたときの実際の理解度、被験者の報告する主観的理解度、及び訛りの強さ、標準テスト（リスニング、リーディング）得点を変数として、相関関係を調べた結果、以下の(a)～(c)が導き出された。

(a) 主観的理解度は実際の理解度の指標とはなりえないだろう。

(b) 被験者の感じる訛りの強さは、実際の理解度及び主観的理解度に影響を及ぼさないだろう。

(c) 総合的英語力は、実際の理解度及び主観的理解度の指標となりうるだろう。

また、総合的英語力により被験者を上中下3グループに分け、グループ間の訛り評価点を統計的に比較したところ、グループ間に有意差は見られなかった。このことから、次が推測される。

(d) 感じる訛りの強さは、英語力によって異なることはないだろう。

さらに、訛り評価、主観的理解度、リスニング得点、リーディング得点の4変数を、英語

力の異なる3グループごとに重回帰分析にか  
けた結果、英語力下位グループに関してのみ、  
リーディング得点が実際の理解度の有意な  
予測変数として検出された。このことから、  
次の示唆が得られた。

- (e) 初級レベルの学習者には、多様な音声英  
語を聴かせる前に、語彙や文法学習を優  
先させるべきだろう。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者に  
は下線)

[雑誌論文](計3件)

Hiroko Matsuura, Reiko Chiba, Sean  
Mahoney, & Sarah Rilling. (2014).  
Accent and Speech Rate Effects in  
English as a Lingua Franca. *System* 46,  
143-150. 査読有

DOI: 10.1016/j.system.2014.07.015

Hiroko Matsuura & Reiko Chiba.  
(2014). Students' Attitudes toward  
Unfamiliar English Accents and their  
L1-Speaking Backgrounds. 『商学論集』  
82巻4号、3-13、査読有

Hiroko Matsuura, Reiko Chiba, &  
Satoshi Ara. (2012). International  
Intelligibility of Learner English. 『商  
学論集』81巻2号、63-74、査読有

[学会発表](計6件)

Hiroko Matsuura. (2015). Modelling  
Perceived Accentedness and  
Comprehensibility in ELF. RELC 2015.  
March 18. Singapore.

Hiroko Matsuura & Nur Rini. (2014).  
International Intelligibility of  
Nativized Lexicon: A Case of  
Indonesian Students Listening to  
Japanized English. TEFLIN 2014.  
October 8. Solo, Indonesia.

Hiroko Matsuura, Reiko Chiba, Sarah  
Rilling, & Julia Kim. (2014). Japanese  
English in ELF Situations: Does  
Lexical Nativization Affect  
Intelligibility? AAAL 2014. March 22.  
Portland, USA.

Reiko Chiba. (2013). Changes in  
Perceptions of Unfamiliar English  
Accents. IAWE 2013. November 18.  
Tempe, USA.

Hiroko Matsuura & Reiko Chiba.  
(2013). Learner Perceptions of English  
Accents. AAAL 2013. March 17. Dallas,  
USA.

Hiroko Matsuura & Reiko Chiba.  
(2012). Japanese Attitudes toward  
English Accents and their L1-Speaking  
Backgrounds. IAWE 2012. December 8.  
Guangzhou, China.

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

松浦 浩子 (MATSUURA, Hiroko)

福島大学・経済経営学類・教授

研究者番号: 70199751

### (2) 連携研究者

千波 玲子 (CHIBA, Reiko)

亜細亜大学・国際関係学部・教授

研究者番号: 10227332